続備南中世山城跡の現状（No. 3）

――――福山ユースドマップクラブの中世山城調査報告――――

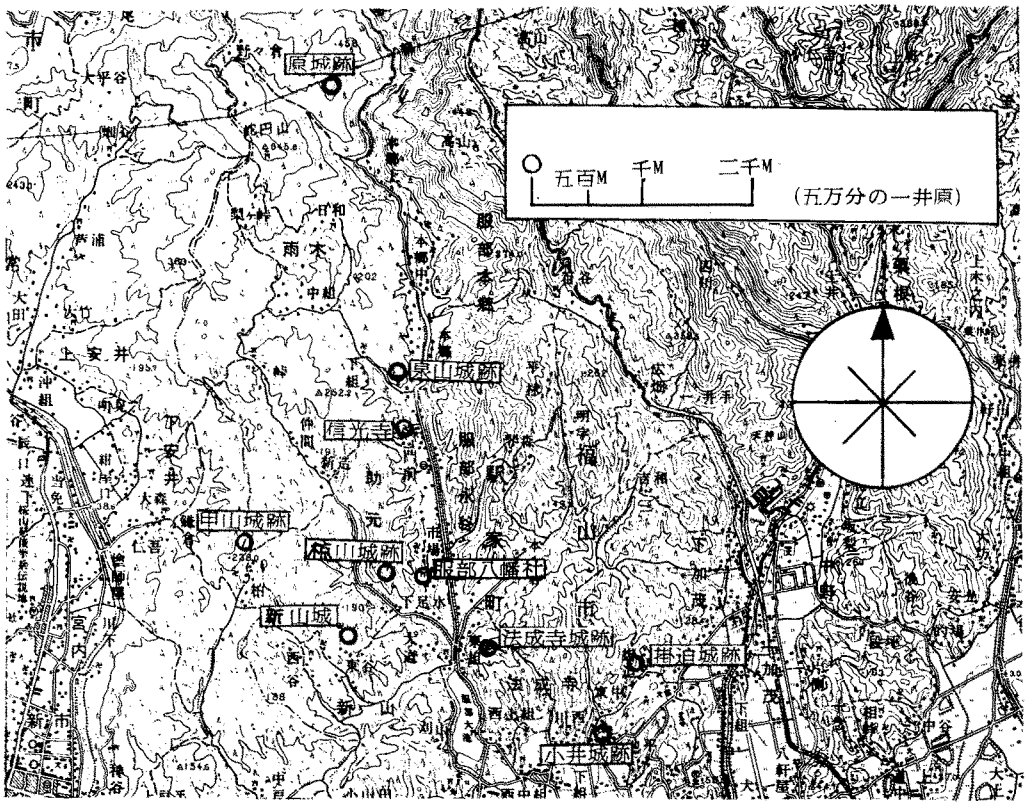
田口義之

9. 掛迫（かけさと）城跡

（所在地）　広島県福山市駅家町大字法成寺字掛迫

位置　神辺平野の北側には吉備高原の南縁をなす丘陵地帯が広がっているが、その一角、福山市駅家町大字法成寺の比高４０ｍ余の低丘陵上に残る山城跡が当掛迫城跡である。

この地は中世最も生産力の高かった耕地である「谷田（迫田）」地帯で、備南の政治の中心であった国府（現府中市府川町）にも近く、中世の在地領主（国人、土豪）達の本拠地としては絶好の場所である。



第①図　駅家町北部山城分布図

◇現状◇　城は東北から西南に延びた比高４０ｍ前後の丘陵を利用して築かれたもので「山城」というよりは「丘城」に類するものである。

現在、城の遺構として７ケの平坦地（郭）と２ケの空堀を認めることができる。

城の構造は尾根を約１４０ｍの間隔をおいて築かれた２ケの空堀（空堀①②）によって城域を画し、その間に３ケの主要郭（①②③郭）を並べ、更に東西に張り出した支尾根上にも４ケの腰郭状の郭を築いた。いわゆる放射状連郭式山城である。（折込第②図）

①郭は山頂に所在する４０ｍ×１８ｍの楕円形の平坦地で、当城跡最大の規模を持ち、城の中心をなす郭であったと思われる。猶、現在この郭には「宮周防守」と刻まれた石碑が建立されている、いつ頃から存在したのか、又、その由来等不明であるが、現在地元の人によって「稲荷さん」として祭られている。②郭、③郭は①郭の西南に４～５ｍの高低差をもって順次築かれた三角形の平担地で、規模は各々２４ｍ×１２ｍ、３１ｍ×１６ｍを計る。④郭は東支尾根上の１８ｍ×７ｍの半円形の平坦地で①郭との高低差は約４ｍである。⑤、⑥、⑦郭は西支尾根上の平坦地で各々１６ｍ×１５ｍ、１０ｍ×７ｍ、５ｍ×１５ｍの規模を持っている、この内、⑤郭は①郭との高低差約５ｍでその南端は小径状となって②郭北西端につながっている。

空堀①は①郭北東直下に存在し、巾５ｍ、深さ１ｍで　その外側は土塁状をなしている。空堀②は③郭の西南２０ｍ下方に所在し、巾５.５ｍ、深さ1.５ｍを計り、現在底は道路及び水路として利用されている。

これら城の遺構が残る尾根の東西両斜面は絶壁状に麓に落ち込み登はんは容易でない。又、現在、城跡の西側谷底には２ケのタメ池が存在するが、もし、これらの池の起源が中世にまでさかのぼるならば城の外堀としての役割を持っていたものと思われる。

以上、まとめてみると、当城は低丘陵上に残る城跡としては良く原型を保ち、又、小規模ではあるが整った構造を持った山城であるといえる。

猶、この城の①郭には「金の茶釜」が埋っているとの伝承があり、往年ここを 堀った人の話によると焼米や瓦片が出土したという。

◇歴史的考察◇　『備後古城記』等、江戸時代の記録によると　当城には宮治部太輔勝国（勝國とも）という者が居城したという。又、『西備名区』によれば宮勝国の在城年代は戦国時代の天文から永禄年間（1532～69）で元亀元年（1570）、尼子義久に味方したため　毛利方の小早川隆景、山名忠興によって攻撃され落城したという、猶、落城に関しては元亀元年説の他、天文２０年（1551）説もあったようで（西備名区）、この場合は当時尼子方として毛利氏に敵対していた宮光音の本拠志川滝山城（福山市加茂町北山）の支城としての役割を果したと伝える（同書）。

城主宮勝国の素性は他に徴すべき史料がなく、備後最大の豪族である宮氏の一族ということのほか不明である。

掛迫城の南西８００ｍのところには小井城跡が存在し、城主として宮兵部太輔勝信の名を伝えている。この人物は天文１０年（1541）２月２４日付宮実信感状（岡山県古文書集第４輯所収「平川家文書」）に見える「法成寺兵部大夫」と同一人物と思われ、又、勝信、勝国の名乗りに類似性が認められ、その居城が接近していること等から　この両人は親子、或は兄弟といった関係にあったのでは

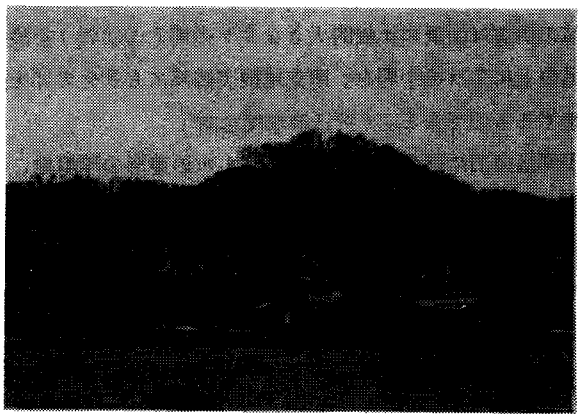
なかろうか。小井城は城というよりは居館と呼んだ方が良いような構造であるから、この場合、その軍事的拠点（詰城）として掛迫城が築かれたのであろう。又、「天文日記」（『石山本願寺日記』所収）の記述（注①）や先述の宮実信感状、更に『備後国福山御領分古城記』（福山城鏡櫓文書館蔵）安那郡東法成寺村の条に

「宮兵部大夫勝信

宮代々の居城勝渡城同時ニ戦死子孫断絶」

とあること等から推定すると　この法成寺の地には宮氏の庶流（宮法成寺氏）が本拠を置き、居館として小井城を、その軍事的拠点として掛迫城を築いて、この附近一帯を支配していたものと思われる。

「井原文書」（広島県史古代中世資料編Ⅴ所収）によると天文１９年（1550）８月２８日、この地で大内氏の軍勢が動き　井原民部丞が敵の首一ツを取っている。当時、大内氏の敵は尼子氏であり、当掛迫城主、小井城主は尼子方であったと伝わる（西備名区）のであるから、これは大内氏の宮法成寺氏攻撃を示すものであろう。この後、弘治３年（1557）頃には法成寺の東隣加茂の地は毛利氏の有力な部将である神辺城主杉原盛重の支配下に入っている（備陽六郡志所収「三吉鼓家文書」）ので　先の『西備名区』の記事を考え合せるとこの頃には城主宮氏も滅亡していたものと思われる。そして、当掛迫城もその存在意味を失ない廃城になったものと推定される。すなわち、当城は在地領主の居城としての性格を持った山城であったと思われるのである。



写真①

（注①）　「天文日記」天文６年１２月１４日、同７年８月１３日、同年１１月５日、天文８年１２月１１日、同年同月２６日条などに尼子方として宮上総介、宮上野介等と共に宮法城寺尾張守の名が見える。

10.　泉山（せんやま）城跡

（所在地）　広島県福山市駅家町大字服部本郷字雨木

◇位置◇　福山市の中心部から北西へ約１０ｍのところに芦田川の支流服部川によって開析された服部の谷が開けている。　当泉山城跡はこの南北に細長い谷の丁度中程に位置する標高１５４ｍの山城跡である。（第①図参照）

服部は古くより開けた地で古墳も多く存在し、古代律令制下の郷『服部郷』に比定されている。中世に於ても、最も生産力の安定していた、いわゆる「谷田（迫田）」地帯で、当城跡の北方３Ｋに

は原城、南方２Ｋには椋山城、又、谷の南出口附近には新山城、大嶝城（法成寺城）と合計５ケの山城が築かれており栄えた地であることがわかる。その他、この地は古代から中世にかけて備後の政治の中心であった国府（現府中市府川町）にも近く、谷の南出口至近には旧山陽道が通る等、山間要害の地であることも考慮すると、中世武士団が本拠を構える地としては好適な条件を備えたところである。

◇現状◇　当城跡は服部谷の西北方にそびえる標高５４５ｍの蛇円山から東南に延びた尾根の突端を利用して築かれた山城で麓からの比高は７０～８０ｍを計り、現在遺構として１２ケの平坦地(郭)と２条の空堀を認めることができる。

城の構造は山頂に比較的大きな２ケの郭（①②郭）を設け、更に山頂から東、東南、西南に延びた支尾根上に７ケの小郭を、南支尾根突端部にも３ケの郭を配したもので、いわゆる放斜状連郭式山城に類するものである。（折込第③図参照）

①郭は山頂に所在する４２ｍ×２１ｍの菱形の平坦地、②郭はその南に高低差２ｍで接した３８ｍ×１７ｍの長方形の平坦地で、その北西端は泉山林道によって破戒され、南端にはテレビアンテナが建設されている。この両郭はその規模、及び位置から見て城の中心をなした郭と考えられる。猶、現在この両郭は巾７ｍ程の緩斜面によって結ばれているが、これは林道工事によって破戒された為と考えられ、元々は明確な段差を持っていたものと推定される。

③郭は①郭の東北に３ｍ切下げて築かれた８ｍ×７ｍの半円形の平坦地、④郭は②郭の東南５ｍ下方に存在する１０ｍ×９ｍの三角形の平坦地、⑤郭は更に１ｍ低く築かれた１０ｍ×４ｍの三角形の平坦地、⑥、⑦、⑧、⑨郭は②郭の西南に高低差２～５ｍで順次削り出しによって築かれた平坦地で規模は各々７ｍ×８ｍ、１２ｍ×１０ｍ、７ｍ×５ｍ、５ｍ×５ｍを計る。これら③から⑨の各郭はその位置、規模から見て主郭（①②郭）に対する腰郭としての性格を持っていたものと推定される。

⑩郭は②郭の南方約１００ｍ下に存在する半円形の平坦地で１７ｍ×１２ｍの規模を持ち、麓からの比高は約３０ｍである。⑪、⑫郭は⑨郭の南に２～４ｍの高低差で接っした各々１４ｍ×１２ｍ、２０ｍ×１０ｍの平坦地で　この内⑫郭には土居荒神社が祭られている。

空堀は⑤郭の２０ｍ下方に存在し、尾根に直交した、いわゆる「堀切り」で巾５～４ｍ、深さ１～２ｍを計り、岩盤を削って築かれている。又、空堀はその役割から考えて①郭の北方尾根続きにも存在したはずであるが、現状ではこの部分は林道によって破戒されていて、それを確認することはできない。

その他、城の南麓は「土居」と呼ばれており、泉山城に関する居館跡の存在が予想される。

猶、城の東、西、南斜面は急傾斜をなし、登はんは容易でない。

以上、この城は小規模ではあるが、その遺構、関連地名等を良好に残した中世山城といえる。

◇歴史的考察◇ 当城に居城したのは『備後古城記』によれば宮常陸介元清（信清とも）という者で天文年中（1532～54）、中島村（福山市駅家町中島）の石崎信実と戦い、宮氏は敗死して城は焼払われたという。又、『西備名区』によると、当城は鎌倉時代の初め中国五ケ国の守護としてこの地に下向した関東武士土肥実平によって築城され、その後土肥氏の庶流が代々居城し、室町時代には宮氏

の居城となったという。猶、同書によれば当城の宮氏は天文３年（１５３４）、毛利元就によって攻め滅されたと伝える。

土肥実平築城説はにわかには信じ難いが、室町時代、宮氏がこの地方一帯に勢力を持っていたのは事実である。宮氏は小野宮左大臣（藤原実頼）の後裔と伝えられ、南北朝時代、宮兼信、氏信父子が足利氏に味方して大きく勢力を伸ばし、この時代には備後最大の豪族に成長していた。その惣領家は新市亀寿山城（芦品郡新市町）を本拠とした宮氏と思われ、一族には比婆郡東城町久代の久代宮氏、同小奴可の小奴可宮氏、神石郡北部の宮氏、又、深安郡北部に根を下した宮氏等があった。

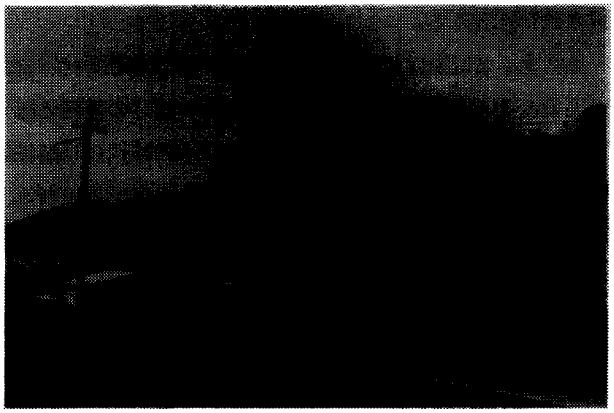
宮氏と服部との結びつきは室町時代初期にさかのぼるようで『山内首藤家文書』８３号によると応永１５年（１４０８）頃、宮次郎右衛門尉氏兼という者がこの地を領している。宮下野守元盛は永享１０年（１４３８）正月１６日、当城東方1.5Kの平林の地を中興寺（新市町宮内）に寄附している。（広島県史古代中世資料編Ⅴ所収「中戸文書」）。これら宮氏兼や宮元盛と当城の宮氏との系譜上のつながりは明らかでないが　『西備名区』は当城の宮氏は亀寿山城宮氏の分れであると伝えている。前述の宮氏兼は亀寿山城主宮兼信の子孫と推定され（広島県史古代中世資料編Ⅴ所収「田総文書」７号）、宮元盛も『福山志料』等によれば亀寿山城主であったと伝えられているのであるから、亀寿山城宮氏の勢力がこの地に及んでいたのは確かであり、これは真実を伝えるものであろう。つまり、当城の宮氏は亀寿山城宮氏の庶家であったと思われるのである。

『芦品郡志』によると宮元清の兄は宮常陸守信光といい、当城の南４００ｍの助元（福山市駅家町助元）の地に菩提寺として禅宗の信光寺を建立したという、又、蛇円山中に鎮座していた八幡社を現在の服部永谷の地に移したのも信光であったと伝えている。その他、服部谷の他の山城、原城、椋山城は共に泉山城の支城であったと伝えている（岡田逸一『服部の歴史』等）。これらのことから推定すると、当城の宮氏は信仰面では八幡社を氏神として崇敬し、信光寺を菩提寺として建立する等してその支配の精神的な拠所とし、又、政治的軍事的には支城として原、椋山の両城を配して、この谷を国人領主的性格で支配していたものと思われる。

『西備名区』によると　江戸時代、産社八幡社の祭礼には「公聞（くもん）」という役があり、これは泉山城主宮常陸介の古格を伝えたものといわれ　その「当日には神馬の外、公聞の乗馬一疋を」出し、その行列には「弓、鉾、鎗、長刀、陣刀、鉄砲等の武器」を揃え、「供御事諸用何事も公聞の下知する事」に違背する者はなかったという。この公聞なる役名は庄園公領制下の庄官、「公文（くもん）」職の伝統を引継いだものに相違なく、この伝えが正しいとするならば、宮氏はこの地を支配するにあたり、この「公文職」を重要な足掛りとして勢力を伸ばしていったものと思われる。

しかし、当城の宮氏が当地を国人領主的に支配したといっても　それは所詮惣領家亀寿山城宮氏の掣肘の範囲内であって、一面では惣領家の重臣としての性格を持っていたものと思われる。そして、そのことが当城の宮氏が没落する原因となったものと思われる。すなわち、戦国時代、亀寿山城宮氏は有力な尼子方として行動しており、尼子氏と対立する大内氏は　天文３年（１５３４）、毛利元就に命じて亀寿山城を攻撃させたのである。宮氏もよく防いだのであるが　当主宮下野入道直信は病死し、嫡子若狭守は幼少で同年１０月には降伏している（『福山市史』上巻参照）。『西備名区』によると、この時宮元清は亀寿山城東方の守りとして当城に籠城し、毛利勢の来攻をまっ先に受け、よく戦った

が元清は討死（逃走したとも）、城は焼払われたという。当時、このように庶家が惣領家の重臣としての性格を持ち、その居城は惣領家の居城に対して支城としての役割を果した、といった例は、安芸の毛利、小早川氏、備後の山内首藤氏等の著名な例に徴すまでもなく、普遍的な型態であるから、これはほぼ真実を伝えたものであろう。つまり、当城の宮氏は主家の亀寿山城宮氏の重臣として　その一翼をにない、戦乱の中でその運命を共にしたものと推定される。猶、『備後古城記』に伝える中島村石崎信実との合戦云々は　この毛利勢との対決の中で近在の国人土豪の内、宮氏に反して毛利方としてこの合戦に参加した者もあったことを示しているのではなかろうか（通常、敵地に攻め入る場合、敵に接っした者がその先鋒を勤める例が多く、石崎信実は毛利軍の先鋒として泉山城に攻め寄せ、そのことがこのように伝えられたのであろう）。



（写真②泉山城跡　東北より望む）

次に宮氏没落後の当城についてであるが『木梨先祖由来書』（新修尾道市史Ⅰ所収）によると天文１２年（１５４３）、尾道市木梨鷲尾山城主木梨杉原氏の一族木梨平右衛門盛兼（後伊賀守）という者が　大内氏に一味して、尼子氏の為に没落した木梨杉原氏を再興した功により、大内義隆より服部５ケ村を給わって甘木村（雨木のこと）勢山城（当城のこと）に居城したという。『備後古城記』服部本郷村の条に

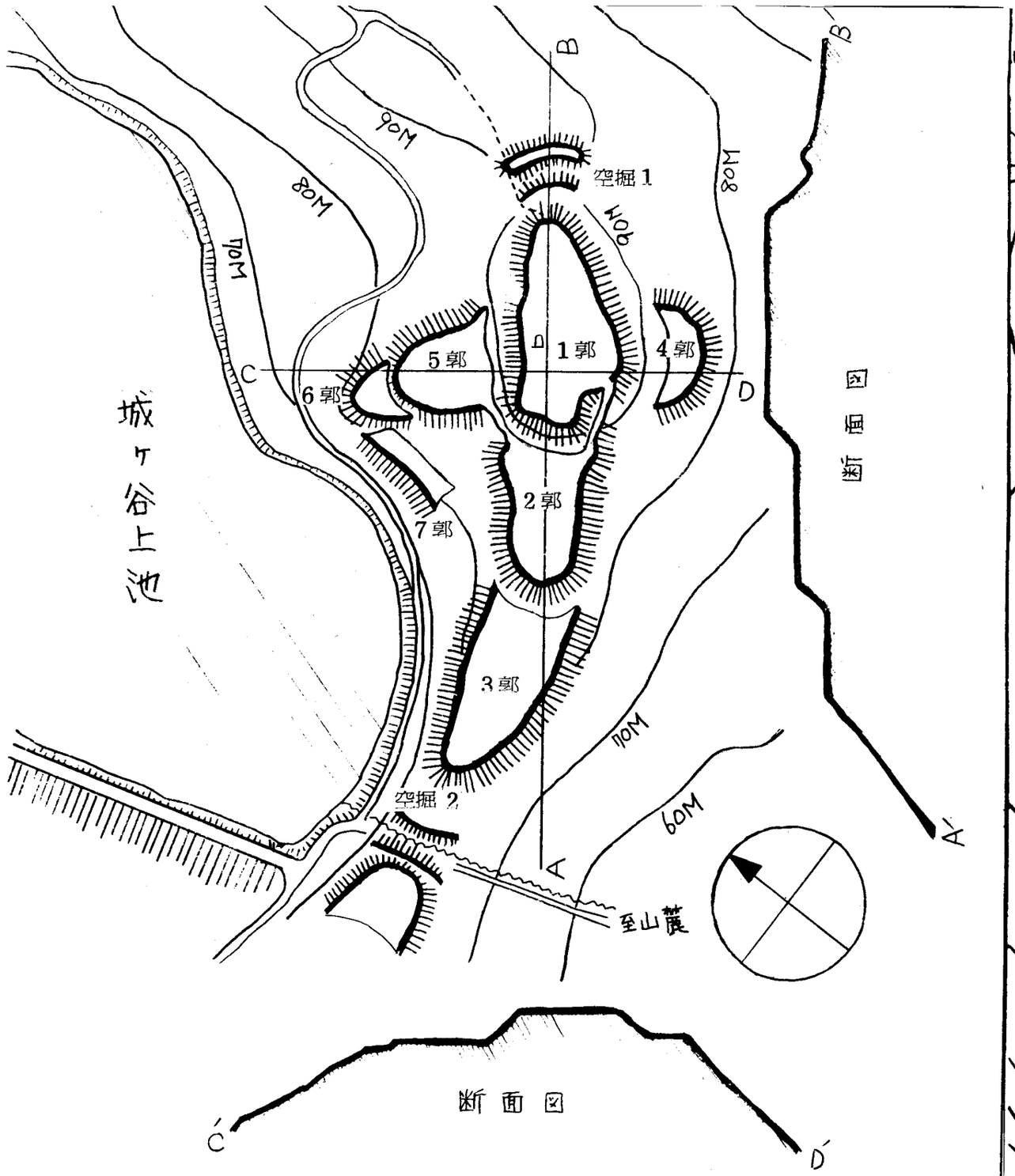
「勢山城　杉原伊賀守盛兼　天文年中」　とあるのはこのことを指しているものと思われる（ちなみに当城跡は雨木と服部本郷の旧村境上に位置し、各種の地誌には雨木村泉山城、服部本郷村勢山城と別々に記録されているが　これは同じ城を指しているのである）。

おそらく、当城は宮氏没落後、大内氏の手に帰し、その後木梨氏に恩賞として宛行れたのであろう。盛兼は大内氏、後には毛利氏に属して軍功があったが、その没後は子息平右衛門が相続したようで『木梨先祖由来書』に

「服部勢山の城主木梨伊賀守盛兼、子平右衛門内膳と申して二人有、即伊賀守家督を平右衛門相続して兄弟共に勢山の麓に住宅す、今に至て、所の者共土居と申して、家敷跡有」

とある。

この後、当城の木梨氏は本家の鷲尾山城木梨氏と共に毛利氏輩下の国衆として活躍したものと思われるが、前掲書によると文禄３年（１５９４）、突然その知行を没収され、浪人したという。その理由は不明であるが、天正１４、５年（１５８６　７）以降、毛利氏の権力は中央政権をバックとして一段と強化されており、今まで反抗的な姿勢を見せていた備後の国衆を容赦なく弾圧している。（注１）その結果、木梨本家、古志氏（本拠福山市本郷町）は取潰され、久代宮氏や神辺城主杉原氏等は知行を大幅に減らされた上　他国に移されている。おそらく、このような動きの中で当城主の木梨氏も本

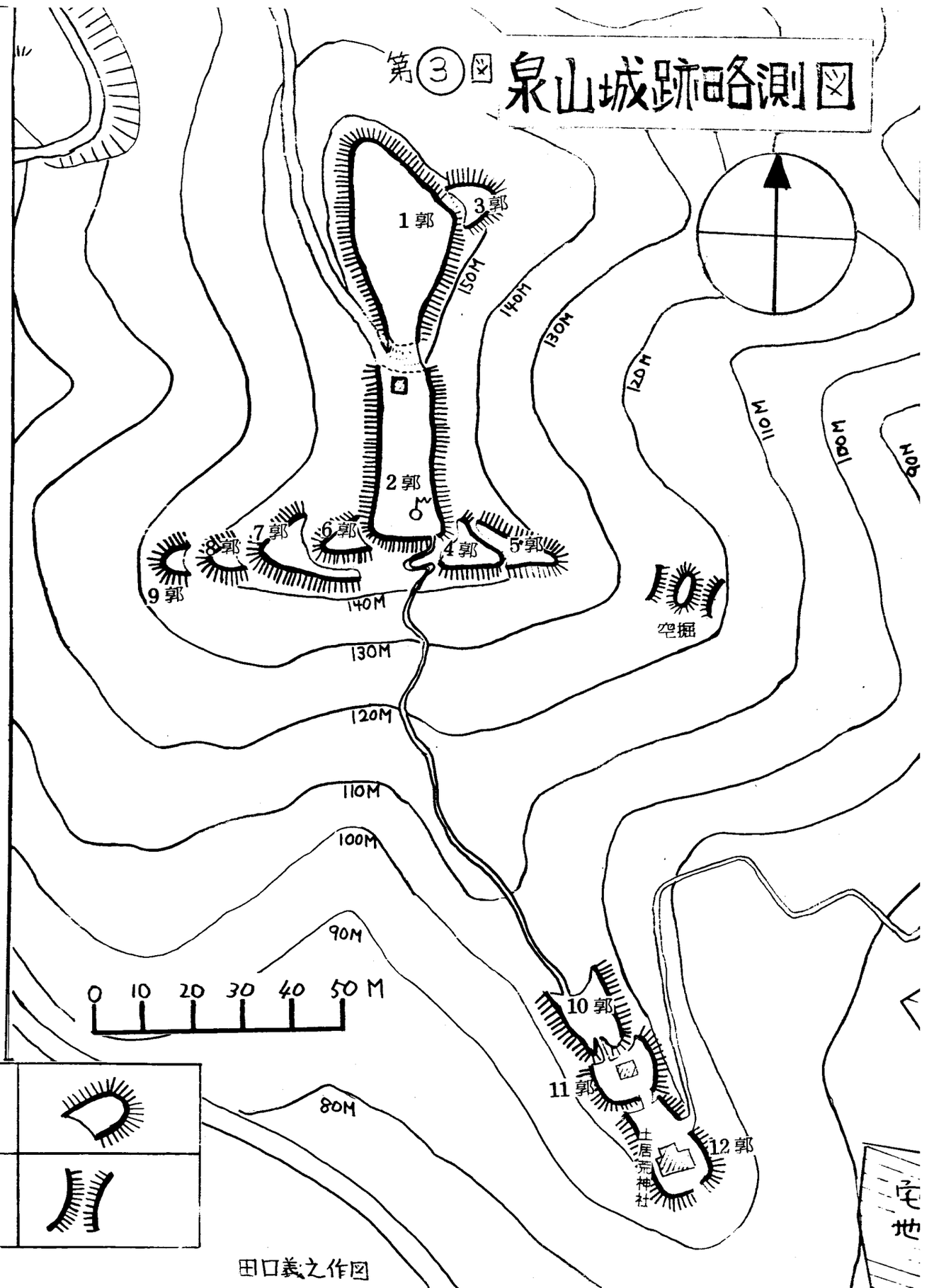


掛迫城跡略測図

第②図

0 10 20 30 40 50M

田口義之作図



泉山城跡略測図

第③図

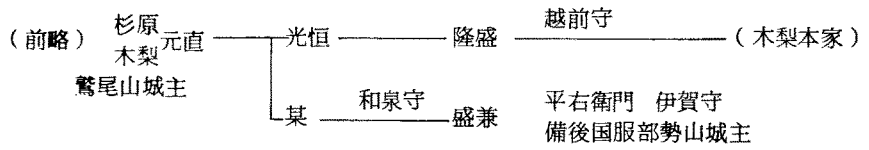
田口義之作図

家と運命を共にしたのであろう。猶、木梨平右衛門はその後「兄弟共に浪人仕、後ハ尾道、府中辺に幽蔽なる体にて罷有」ったという（木梨先祖由来書）。

以上、やや散漫な記述となったが　まとめると、当泉山城は室町から戦国期にかけて服部の地を領した、宮氏、木梨杉原氏の一族によって　その居城として使用され、戦国末期木梨氏が没落した後、廃城になったものと思われる。

◇参考◇

木梨氏系図　　（譜録木梨平左衛門恒通家）より



（注①）　松浦義則　「戦国末期備後神辺城周辺における毛利氏支配の確立と備南国人衆の動向」
（「芸備地方史研究」　110　111合併号）
猶、福山ユースドマップクラブとは現備陽史探訪の会の前身である。（為念）

（城郭研究部会部会長）